

保健師 最前線

和東町で、もう一度新人から

和東町
磯部 あゆ子 さん



「見た目は結構いってるんですが、保健師としては1年目なんですよ。」

と笑う磯部さん。社会人を経験後に、看護学校に入学したという経歴を持つ。最初は保健師志望ではなかったのだが、看護学校時代に若いうちからの生活習慣などの意識を変えていくことが大事だと実感し、保健師として働きたいと思うようになった。

「病院の実習では、予防で避けられる病気で亡くなっていく方を見るのがつらくて、つらくて。」

現在は、主に母子の健診や家庭訪問を担当している。といっても、保健師は係長と磯部さんの2人だけ。母子も成人も「出来る人がやる」態勢だ。新人でも一人前に現場対応を任されるが、これまでは身近に子どもと接する機会がほとんど無かったため、戸惑うことばかり。健診も定められた基準に則って行うが、その判断が難しい。

「例えば4ヵ月で首が座るという基準がありますが、どの状態で座っているといえるのかもよく分からなくて。知識だけでは全く太刀打ちできません。」

不確かなことは言えないため、母親から相談されたことも係長に聞いて後から電話で答えたりするようにしている。ある程度人数を診て経験していくしかないものの、和東町は出生数も少ないため、他保険者に研修に行ったりして補っている。

今気になっているのは、和東町の子どもに虫歯が多いことだ。歯磨き指導を行ったり、普通は1回の幼児へのフッ素塗布の機会を、3回に増やしたりしているがなかなか改善しない。

「おじいちゃん、おばあちゃんにおやつをもらう機会が多いのかもしれませんが。和東町は同居世帯が多いですから。」

1年目の保健師さんと話しているようには感じさせない磯部さん。社会人を経験しているというだけではなく、磯部さん自身の親しみやすい人柄で、町や職場にとけ込んでいるからだろう。

「まずは母子で、この人に聞いたら大丈夫！な保健師を目指したいです。」